

# 沖縄は 海と空でできている



第4話 離島に台風が来ると大騒ぎ【後編】

**ジョージ・スギーニー**  
**GEORGE SUGENEY**

## 脱出できない

---

阿嘉島に渡って二日目。

明日本島へ帰る予定だったが、昨日フィリピン沖で台風15号が発生したので急遽今日帰る事にした。

今度の台風は沖縄を直撃するらしい。

上陸するのは今日の深夜から明日の朝にかけてらしいが、今朝起きた時には既に風が強く海も荒れ始めていた。

他の観光客も予定を繰り上げて本島へ帰ろうとし、ターミナルの切符売場は人が殺到している。しかしチケットは昨日の時点で全便満席となり、島から出られなくなって途方にくれる人達で溢れていた。

幸いにも我々は昨日のうちにフェリーのチケットを押さえていたので、午後の便で島を出る事ができる。

いち早く台風情報を教えてくれたビーチバーのタケちゃんのお陰だ。

フェリーの時間まではまだ大分あるが、こんな天気では海で泳ぐ事もできず、特に観光する所も無いので暇を持て余した。

部屋でゴロゴロしていても仕方ない。

「小湊、バルコニーで島酒飲みながらゆんたくでもするか」(島酒＝泡盛)

ゆんたくとは雑談をすることだ。

じゃあ`雑談、って言えばいいじゃないかと思われそうだが、単なる雑談とも少し違う。

例えば、この宿には宿泊者が共有で使えるバルコニーがある。

そこにはテーブルがあり、酒を飲みながら話をしていると知らない人も「いいですか？」と輪に入ってくる。

最初3人で飲んでいたのが、いつの間にか10人ぐらいになっているというのは珍しい事ではない。

沖縄には`イチャリバチョーデー、という言葉があり`一度会えば兄弟、という意味で、出会ったらもう仲間なのだ。

だから部屋で飲むのではなく、敢えてバルコニーに行くというのはそういう意味もある。

すると小湊が、

「え、朝から酒ですか？」

と言う。

「お前と朝から紅茶を飲んでも面白くないだろ」

「そりゃそうですけど、まだ昨日の酒が・・・」

「俺は下の売店で酒を買ってくるから、お前は食堂で氷と水を貰ってきて親父を連れてバルコニーへ行っていてくれ」

小湊は気怠そうに階段を降りて食堂へ向かった。

私は下の売店に行き、久米島の久米仙(泡盛)と軽いつまみをいくつか買ってバルコニーへ向かった。

バルコニーに着くと、親父と眉を顰めた小湊が待っていた。

外は風がかなり強くなってきた。

小湊が眉を顰めるのも分かる。

取り敢えず飲み始めたが、風がビュービュー鳴っていて会話がよく聞き取れない。

おまけに強風でプラスチックのコップは倒れるわ、つまみは吹き飛ばされるわでなかなか落ち着いて飲めない。

はたから見ている人に「そこまでしてバルコニーで飲まなくても、と言われそうだ。

ヨシ、

「小湊、中のゆんたく場に移動するぞ」

「え、中にもあるなら早く言って下さいよお」

結局、建物の中のゆんたく場に場所を変えた。

すると外から村内放送が聞こえてきた。

「本日の高速船は、全便欠航となりました、

やっぱりな。

これだけ風が吹いていたら波も高いだろう。

台風が発生すると、高速船、フェリー、飛行機の順に欠航になる。

高速船じゃなくフェリーのチケットを取っておいて正解だった。

フェリーは大きいので高速船に比べると欠航になり難いのだ。

とはいえ、フェリーも大丈夫だろうか？

思ったより台風のスピードが速い。

若干不安になってきた。

すると二人組の女性が外から帰ってきた。

高速船に乗る予定だったようだ。

「なんやあ、こんなんやったらフェリーにしとくんやったわあ」

どうやら関西人だ。

大きな荷物を持って部屋に入っていった。

するとすぐさま部屋のドアが開いて、三線を片手に我々の方へ近付いてきた。

「ご一緒さしてもろていいですか？」

「どうぞどうぞ。よかったら島飲みます？」

「あ、酒飲まれへんから大丈夫です。おおきに。三線弾いてもいいですか？」

「いいですねえ。お願いします」

そう言って `ハイサイおじさん、を弾き始めた。

この曲は沖縄に来た事がない人でも知っているぐらい有名な曲だ。

`ハイサイ、とは沖縄で男性が使う言葉で、`やあ、みたいな意味だ。

女性は `ハイタイ、と言う。

`ハイサイ、の意味を `こんにちは、と言う人もいるが、もう少しフレンドリーな感じだ。

因みにこんにちはは `チュウウガナビラ、と言う。

この二つを併せて使う事もある。

例えば、

`ハイサイ、グスーヨー、チュウウガナビラ、ワンヌナーヤ、ウエスギヤイビーン、ユタシクウニゲーサビラ、

全く日本語らしい面影は見当たらないのだが、ある本によると平安時代の頃の日本の言葉が残っているらしい。

因みにこの呪文のような言葉の意味は、

`やあ、皆さんこんにちは。私の名前は上杉です。よろしくお願いします、

という意味だ。

その本によると、沖縄は島国のため言葉が進化しなかったと書いてある。

確かに日本語に似ている部分も無くはない。

それにしても関西のお姉さん、曲が止まらない。

次から次へ弾いている。

`島唄、と `涙そうそう、は、私も知っていたので一緒に歌った。

よくこんなに覚えたものだ后感心していると、お姉さんの携帯電話が鳴った。

「はい。はい。じゃあ二名お願いします。え、あと1時間後？分かりました」

1時間後に何があるんだ。

「セスナのチャーター便が取れた」

何？そんな物があるのか。

なんかセレブだ。

「もう少ししたら那覇空港を出てこっちへ向かうらしいんやて。せやからもう準備してケラマ空港に行かなあかんわ。すぐに準備せんと」

そう言って急いで三線をしまい、部屋に荷物を取りに行った。

そして宿の玄関先で送迎の車を待つと言うので、我々も玄関先で見送る事にした。

間もなくして車が到着し、三線を弾いていたお姉さんが後部座席から顔を出すと、  
「ちょっとやったけど楽しかったわ。縁があったらまた会いましょう」  
「はい、僕も楽しかったです。なんか三線が欲しくなりましたよ。じゃあ気を付けて」  
横殴りの雨が降る中、二人を乗せた車は阿嘉大橋の向こうへ消えていった。  
このお別れは、ある意味、始まりでもあった。

今度は宿のお姉さんが我々を探していたようで、私の名前を呼びながら走ってきた。

「上杉さ〜ん、確かフェリーで帰るんじゃないよ？」

「そうです」

何だろう？

走ってくるという事はただ事ではなさそうだ。

「台風が思ったより速いんで2時間後に出航するそうです」

「えっ、2時間後？そんなに早く？」

「もしかするともう少し早くなるかもしれないので、いつでも出られる様に準備をしといた方がいいです」

急いで酒とか片付けないと。

急に忙しくなってきた。

部屋に戻って荷支度を始めた。

手当たり次第に鞆へ荷物を詰め込んでいると、誰かが部屋のドアをノックした。

「コンコン」

「もう準備できました？」

宿のお姉さんだ。

「まだですけど」

「出発がまた早くなって1時間後に出る事になりました」

何だって？急がねば。

「小湊、島酒入るか？」

「もう飲めません」

「バカ、鞆に入るかって事だよ」

「ああ、そっちも無理です」

急いで鞆に荷物を詰め込んだからグチャグチャになって入らなくなってしまった。

「親父、入る？」

「入らんけど、手に持って飲みながら行けばいいじゃん」

どれだけワイルドなんだ。

仕方ない、手で持っていか。

ちょうど準備ができた時、また誰かが部屋をノックした。

「コンコン、

「上杉さん」

宿のお姉さんだ。

また早くなつたか？

「フェリーが欠航になりました」

「えーっ・・・」

3人は顔を見合わせた。

そして言葉を失った。

「予想以上に台風が速かったみたいで・・・」

最悪の結果になった。

台風の予想進路は、今日の深夜から明日の早朝に沖縄本島を直撃し、そこから進路を本州へ変えると予想されている。

この進路だと明日も欠航になる可能性は高い。

元々明日本島へ帰る予定だったから、明日の宿泊先は那覇で取っている。

状況によってはキャンセルしなければならないが、そうなると阿嘉島で泊まる宿を見つけなければならない。

ここは明日も泊まれるのだろうか？

お盆時期に空いているとは思えない。

何とかして今日中に本島へ帰らないと。

そうだ、関西のお姉さんが乗っていったセスナをチャーターすればいいんだ。

宿のお姉さんに聞いてみた。

「すみません、チャーター便てお願いできるんですか？」

「多分もう空いてないと思うけど、一応聞いてみましょうねえ」

「お願いします」

セスナに乗るのは初めてだ。

空いているといいが・・・

するとすぐに部屋をノックする音がした。

早いなあ。

ドアを開けて驚いた。

「あれ、関西のお姉さん」

「ただいま」

「ただいまって、セスナで帰ったんじゃないですか？」

「それがなあ、セスナ来たには来たんやけど着陸できへんかったんや。何回かトライしよったんやけど、結局諦めて那覇に帰ってったわ」

とうとう空も打ち止めか。

空が駄目になったという事はもう打つ手がない。

「じゃあ僕らも今チャーター便をお願いしてるんですけど、多分駄目ですね」

「どうやる。うちらもう一箇所別の所にチャーター便お願いしてて返事待ちやねん」  
もう一箇所？

この人はいったいどんなパイプを持ってるんだ。

そこへ宿のお姉さんが戻ってきた。

「チャーター便取れましたよ」

「ホントですか？」

「はい。3時間後に来るそうなので、その頃また声掛けましょうねえ」  
良かった。

もう諦めかけていたが、やはり最後まで希望を捨てては駄目だ。

初めてのセスナがこんな天候で残念だが、少しワクワクしてきた。

すると関西のお姉さんの携帯電話が鳴った。

「はい、そうです。はい。え、ホンマですか？分かりました。1時間半後ですね」  
チャーター便が取れたのか？

「やった奇跡やわ。チャーター便取れたわ」

良かった。

結局関西チームは1時間半後、東京チームは3時間後に出発する事になった。

もう荷仕度はできているのでいつでも出発はできる。

出発までお互い時間があるので、また三線を弾いてみんなで歌った。

と言っても歌えるのは島唄と涙そうそうぐらいなので、殆どお姉さんのソロライブだった。

10曲位弾き終わるとライブは一旦休憩し、ここで初めてお互いの自己紹介をした。

三線のお姉さんは「白木ランさん、と言って、やはり関西出身だった。

そしてもう一人のお姉さんは、真坂順子さんと言って同じく関西出身だ。

私は年齢を当てるのがワリと得意な方だが、この二人については全く分からない。

25歳以上50歳未満といった感じだ。

そこまで幅が広いと実年齢がどうしても気になる。

女性に年齢を聞くのは失礼だと思いながらも聞いてみた。

「この人失礼やわあ、という顔は全くしなかったが、何回聞いても絶対に口を割らない。  
寧ろこちらが知りたがっているのを楽しんでいた。

実はこの10年後にランさんと久々の再会をしたのだが、全く変わっていなかった。

再会した時の見た目は50歳以上には見えなかったので、当時の年齢は40歳未満だったと思われる。

そして今でも年齢は不詳だ。

自己紹介の後、今度は知名度の低い阿嘉島をどうやって知ったのかという話になった。

ランさんと順子さんは二人でよく旅行をしていて、数年前にランさんの職場の人に教えてもらったらしい。

それから毎年来ているそうだ。

私が阿嘉島を知った経緯を話すと、二人とも大笑いしていた。（経緯は第1話を参照してください）

「えー、そんな事あるの？オッチョコチョいやなしかし。座間味島に行こう思て、間違うて阿嘉島に降りるてありえへんでえ。しかも帰りのフェリーを乗り過ごすまで、違う島やて気付かへんのやろ？ほんで乗り損ねてどないして帰ったん」

「切符売場のおじさんに、『じゃあ次の船に変更できますか？』って聞いたら『今日はもう船は無いよ』って言われたんですよ」

「その後に高速船あるやろ」

「そうなんですよね。だけどそれを教えてくれなくて、何とか本島に帰る手段が無いか聞いたら港に係留されている船を指して、『あの辺の海人に本島まで乗せてってくれって頼んでみるといさ』って言うんですよ」

「切符売場のおっちゃん、なんか冷たいなあ」

「でもそれしか手段が無いと思ったんで、50歳位の海人に頼んでみました。そしたら『あいつ(切符売場の人)そんな事言ってた？まだ高速船があるじゃないか。あの野郎何を言ってるんだ』って言うんです」

「せやろうなあ。何で高速船の存在を隠したんやろ」

「すると切符売場のおじさんが軽トラですっ飛んできて、『この後高速船があつて本当はもう満席なんだけど立ち見でよければ乗せてあげられるよ』って言われて、`立ち見、って野球観戦かつ！ってツッコミたいのをグツと堪えて、高速船に乗る事ができたんです。高速船は満席だから`今日はもう船は無い、って言ったみたいです。でも満席のところを何とか乗せてもらえたんで、結局切符売場のおじさんは良い人でした」

「そうや、ええ人やんかあ。あかんで冷たいとか言うたら」

「冷たいって言ったのランさんですよ」

「そか」

そんな昔話をしていると、宿のお姉さんがやってきた。

「上杉さん、チャーター便はあと2時間位で着くそうです」

「了解です。何人乗りなんですか？」

「10人乗りだそうですよ。だから上杉さん達と他の宿のお客さんも一緒に乗るらしいです。10人乗りといっても船長入れて10人ですから」

ん？今確か`船長、と聞こえたが。

聞き間違いか？

機長、船長、機長、船長...



聞き間違えそうもない。

お姉さんの言い間違いなのか？

「すみません、今何と仰いました？」

「あ、船長入れて10人です」

「船長？」

「はい」

しまった。

確かに`チャーター便、としか言ってなかった。

チャーター便と言えば勝手にセスナのイメージをしていたが、船もチャーター便と言うのか。

そっか`船をチャーターする、って言うもんな。

迂闊だった。

やってしまった。

まあいいか、帰れるなら。

それにしてもフェリーが欠航になるぐらいの波なのに、それよりもデカイ船が来るのか？

フェリーよりもデカくて10人乗りって想像がつかない。

どんな船が来るんだ？

とっても嫌な予感がする。

波に強い船ならいいが。

私は船の事をよく知らないから、きっと私が見た事がないような波に強い構造の船があるのだろう。

そろそろランさん達の出発時刻だ。

また今回も玄関まで見送る事にした。

同じ人を一日に2回見送るのも珍しい。

ランさんが送迎の車に乗り込むと後部座席から顔を出して、

「ジョーさん達もチャーター便取れたから、今度こそホンマにお別れやな。そう言っってまた会ったら面ろいけどな、ハハ。東京に行く事があったら連絡するわ」

そう言い残して行ってしまった。

ランさんは明るくてよく喋る女性だったので、居なくなるとポツカリと穴が空いたようだった。

そして三線の音が消えたゆんたく場では、男3人のゆんたくが始まった。

親父が脳梗塞で倒れた時の話や、昔外人のお客さんが親父の店に来て、親父は英語が話せないから苦労をしたなんて話を聞いた。

その時は何とかあったと言っているが、外人の方にも聞いてみないと本当に何とかあったのかは不明だ。

あと親父が昔の事を語る時、必ず出てくるのは「俺は刈谷で一番最初の男性美容師だ」という事だ。

親父が地元の愛知県刈谷市で店を構えたのが昭和37年。

刈谷市は自動車のトヨタ発祥の地で、石を投げればトヨタ系の人に当たると言うぐらい、街の中はトヨタ系の人ばかりだ。

因みに祖父はトヨタの教官をしていたらしい。

それを私が知ったのも、つい半年前の事だ。

そんなトヨタ一色の街の男性美容師第一号だったそうだ。

開店当初は行列が50m位できたと言っていて俄かに信じ難いが、昔から来ているお客さんが「オープンした時は行列がユニー(大型スーパー)の次に長かった」と言っているのだから嘘ではなさそうだ。

親父の昔話でこんな変わった出来事も話していた。

親父がまだ見習い美容師の頃、仮病を使って仲間と内海(愛知県 知多半島の海)に遊びに行ったそうだ。

親父が勤めていたのは岐阜県だったので、よっぽどの事がなければ仮病がバレる筈はなかった。ところが、よっぽどの事が起きてしまった。

海で遊んでいると、お隣の三重県から流れ着いた遺体を発見してしまったそうだ。

当然テレビのニュースや新聞で大騒ぎになり、第一発見者の親父は警察に調書を取られた挙げ句、勤め先に仮病がバレてしまったそうだ。

人間そうそう遺体を発見する事は無いと思うが、よりによって仮病を使っている時に遭遇するとは。

それ以来親父は仮病を使わなくなったらしい。

だいたい勤務先の社長も、荒れ狂った海に落ちても生還してくるような親父が「ちょっと体調が悪いです」と言ってきた時点で仮病を疑うべきだった。

そんな昔話を聞いていたら、気が付けばチャーター便が到着する30分前だ。

そろそろ乗り場へ移動した方がいいのだろうか。

そう思っているのを察知したのか、宿のお姉さんが来た。

「上杉さん、思った以上に波の影響を受けていて、まだ1時間以上はかかるみたいです。一緒に乗る人が民宿 あかじまに居るんで、取り敢えずそちらに行って待機しましょう」

「了解です」

それにしても通常那覇から1時間位で来る事ができるのに、3時間以上かかっている。

そんな状況で船に乗って大丈夫だろうか。

フェリー並みに大きいのならいいが、10人乗りというのが引っ掛かる。

他の島で何十人と乗ってくるから、阿嘉島で乗れるのが10人という事なのだろうか。

それとも貨物船だから人間は10人しか乗れないのか？

いくら貨物船でも人間が10人って事はないだろう。

う～ん、謎だ。

取り敢えず民宿あかじまへ移動しようとして玄関を出た時、聞き覚えのある声に呼び止められた。

「ジョーさん、ただいまあ。また帰ってきたでー」

ランさんだった。

「あれ？また着陸しなかったんですか？」

「ハハハ、そうなんやて。今度は一瞬タイヤは着いたんやけどな、また飛び立ってしもた。タッチアンドゴー言うヤツや。ジョーさん達今から？」

「そうなんですけど、空がそんな状況なのに海は大丈夫なのかってちょっと不安です」

「今空港から帰ってくる時に海見たけど、結構荒れとったで。気い付けてな」

ホントに大丈夫だろうか。

那覇から呼んでいるから今更キャンセルというわけにもいかない。

取り敢えず民宿あかじまで待つ事にしよう。



民宿あかじまに着くと、5歳位の男の子とそのお父さんが無言で待機していた。

お父さんは口には出さないが、顔を見る限り不安を隠し切れていない。

子供の方は、`飛んだ夏休みだ、という顔で不貞腐れた感じと不安な色が混じっていた。

それでも父親に話し掛けられると気を使っているのか、笑顔を作る。

それは父親が怖いから気を使っているという雰囲気ではない。

子供が親に気を使っていると良い親子関係ではないと思われるかもしれないが、私は気を使っている方が良い親子関係だと思っている。

`気を使っている、というよりは、`考えて接している、という方が正確かもしれない。

何も考えずに親と接している子供というのは、大抵の場合ワガママな子が多い。

その言葉の通り何も考えていないから、`我がまま、なのだ。

でもそれは子供が悪いわけではない。

作ったのは親なのだ。

何故ワガママな子ができるのか考えてみると、例えば子供が親に何か欲求をぶつけてきたとする。

要するにワガママな事を言ってきた時に、忙しいからと適当にあしらっているとしつこく迫ってくる。

具体的に説明をしてやらないからしつこくなるのだ。

例えば、「この前買ったでしょ」とか「そういうワガママは駄目」と抽象的な言い方をすることが多い。

子供はこの前買って今日が駄目な理由は分からないし、「そういう」というのは何を指しているのかなんて、小学校の国語の問題出てくるような事だから、幼稚園に通っている子や、それよりも幼い子供に言っても理解できる筈はない。

理解できないから更にしつこくなり、「あんまりしつこいと怒るよ」とか「駄目なものは駄目」と曖昧さに拍車がかかり、やがて「煩いっ」と怒鳴り付けられ静かになる。

しかし怖いから黙っただけで、「自分の何がワガママだった」と理解して大人しくなったわけではない。

だから時間が経てば当然同じ事は起きる。

そうすると「この前も駄目って言ったでしょ」と言われ、また同じ事が繰り返される。

子供がワガママを言ってきた時に、何故ダメなのか具体的に話してやれば子供は考えるようになる。

それも1回や2回じゃダメだ。

何度も過去の事を踏まえて具体的に話してやる。

過去の事を忘れていけばもう一度教えてやり、覚えていたら「そうだ」と褒めてやればいい。

まるで大人に話している様な内容かもしれないが、子供は思っている以上に理解力がある。

それを具体的に何度も話してやらないから理解できないし、人間一回言われたぐらいでは分からない事は沢山ある。

それは大人も子供も同じだ。

よく「うちの旦那は何回言っても直らない」と耳にするが、それは相手が真剣に直す気が無いからだ。

そういう点では、まだ子供の方が直す気持ちは持ち合わせていると思う。

子供に対して具体的に繰り返し話してやれば、そのうち「これを言ったらお父さんは何て言うだろう」と考えるようになる。

すると変なワガママは言わなくなるものだ。

いずれ子供がぶつけてくるのはワガママではなく質問に変わってくる。

と言いつつも、私も弱い人間だから感情に流されてしまう事は多い。

子育ては難しい。

元々ゼロで生まれてきた生き物に対して親が植え付けていくのだから、子は親の鏡とはよく言ったものだ。

この民宿あかじまに居る5歳児を見ていると、「台風が来て夏休みの旅行が台無しになって不満はあるけど、それをお父さんに言っても仕方がない、そんな風に見えたのだ。

そんな子供を見ていると健気に見え、良い親子だなと思った。

子供に言ってやりたかった。

「今は悪い思い出だと思っているかもしれないけど、君が大人になったら父親との忘れられない良い思い出になっている」と。

民宿あかじまで待つ事2時間。

予定よりも大幅に遅れて、チャーターした船が港付近まで来たようだ。

我々は港へ移動した。

どれぐらいの大きさの船が来るのだろうか。

そればかりが気になっていた。

海は荒れまくっている。

フェリーのような大きさでもかなり揺れると思うのだが...

港が見える所まで歩いて来たが、それらしい船はまだ見当たらない。

そして堤防の辺りまで来た時だった。

船の操舵室の上でクルクル回っているレーダースキャナーが、堤防の向こう側に上からひょっこりと顔を出して移動しているのが見えた。

「小っさ」

思わず口に出た。

まだ船の本体は見えないが、レーダースキャナーが堤防から顔を出すぐらいでは相当小さい船だと確信した。

そして船全体を見た時、あまりの小ささに鳥肌が立った。

それは10人乗りの小さな釣り船だった。

とてもフェリーが欠航した海へ向かう船ではない。

雨を凌ぐ所は小さな操舵室があるだけで、我々が入るスペースはとても無い。

という事は、台風の中を4時間位ずっと甲板に居る事になる。

とても無理だ。

しかも船は先程から着岸しようとしているが、強風と荒れ狂った波によって全然できない。

着岸する岸から2m位の所まで船を近付けて、すぐさま操舵室から出てロープを港の係員に投げるが、風と波で流されるので操舵室から出た時には既に10m位岸から離されている。

だからロープが岸に届かないのだ。

それを何度も何度も繰り返していた。

着岸しようとトライし始めてから10分が経とうとしているが、未だ着岸できない。

尚も格闘は続いた。

そして更に10分が経過した頃、やっとロープが届いたのだ。

着岸に20分掛かるなんて、考えられない程の荒波だ。

こんな激しい海で、去年脳梗塞を起こした親父を船に乗せるのは危険だ。

小湊は、

「上杉さん、ここはお金だけ払って乗るのやめましょうよ」

と言う。

しかし那覇から台風の中呼んでおいて、それは私にはできない。

なので親父に言った。

「俺は呼んだ手前乗らないわけにいかないから乗るけど、親父は危ないから明日か明後日のフェリーで帰って来て」

そう言うとき親父は、

「何で？大丈夫だ。こんな波、釣りで何回も乗っとる」

やはりそう来たか。

そう言うだろうと思っていたが、今度ばかりはハイそうですかとはいかない。

「親父は去年脳梗塞やってるでしょ。今までと違って踏ん張りが利かないからダメだって」

そう言っても「大丈夫だ」の一点張りだ。

小湊は小湊で、

「上杉さん、乗るのやめましょうよ」

の一点張りだ。

「小湊も乗るの嫌なら乗らなくていいぞ。俺は乗る」

そんなやり取りをしていると、島で「カズさん」と呼ばれている40歳位の真っ黒な人がスクーターでやって来て、何やらチャーター便の船長と話している。

一体何を話しているのだろう。

あの人も乗りたいのか？

だったら我々の席を譲りますけど？

10分位すると話が終わり、カズさんが我々の方へ歩いてきた。

そして私にこう言った。

「こんな海じゃ危ないからさあ、悪いけど乗るのはやめといてくれないか。今向こうとも話は付けたから」

命が救われた。

正直、乗ったら9割の確率で明日の朝刊にも載るんじゃないかと思っていた。

心の底から感謝した。

「ありがとうございます。正直怖かったんですけど、那覇から呼んだ手前乗るしかないと思ってたので助かりました」

「この天候じゃあ乗ってても生きた心地がしないよ」

何はともあれ命拾いをした。

もうチャーター便は懲り懲りだ。

今度からはフェリーが欠航になったら素直に諦めよう。

一方、その頃ランさん達は、相変わらず宿で三線を弾いていた。

「ジョーさん達、無事に出航したやろか。結構な波やったで」

「そうやね。ちょっと港へ見に行こか」

そう言って港まで来てみたが、それらしい船は見当たらない。

「もう行ったんかなあ。まさかあの小っちゃい船ちゃうやろなあ。人が何人か集まってはるけど」

「いやあ、あれはないでしょ。いくらなんでも小っちゃ過ぎるわあ」

「せやなあ。じゃあもう行ったんかな、宿戻ろ」

そう言って売店に立ち寄ってから宿に戻り、ゆんたく場に行くと酒盛りをしているグループが居た。

「あ、ランさんただいま～」

「あれ、ジョーさん。船は？」

「それがさあ、来たのが小さい船でさあ」

「まさか、港にあった釣り船みたいなやつ？」

「そうそう」

「まさかコレちゃうやろなあって言うつつたんやけど、それやったとは」

「結局カズさんって人が来て「やめた方がいい、って言ってくれて助かった」

「ああ、カズさんね。知つとる知つとる。まあでも良かったやん。乗つとつたら危なかったで」

「そうですね、俺もそう思ってたんですけど、呼んだ手前自分からは断りづらくてカズさんに助けられました」

すると小湊が、

「だから僕はやめようって何度も言ってたのに」

「お前4時間かけて那覇から荒波の中を来てくれたのに、よく簡単に「やっぱり乗るのやめま  
すう、って言えるなあ」

「だって怖いもん」

「まあいい。俺も怖かった」

結局阿嘉島から脱出できなかつた5人組は夕食の時間までゆんたくをしていたが、流石に飲み過ぎたのと気疲れで、夕食が終わると早々に寝てしまった。

早めに寝てしまったせいで、深夜に一度目が覚めた。

外の様子が気になり、玄関の自動販売機へジュースを買いがてら台風の様子を見に行った。

宿の中はシーンとしているが、外からはゴーゴーと風の音が聞こえる。

玄関の外へ出るとちょうど台風が通過中で、もの凄い嵐だった。

流石に沖縄の台風は迫力が違う。

お店の看板を外壁に付けずに建物へ直書きするのも頷ける。

缶コーラを2回で飲み干し、また眠りに着いた。



翌朝目を覚ますと、台風一過という空ではなかった。  
台風は久米島を過ぎた辺りで進路を本州へ変えたため、まだ強風域の中にいた。  
朝食を食べ終わると宿のお姉さんが部屋にやってきた。  
今日の船は、朝の時点で全便欠航が決まったそうだ。  
そこで困るのは今日の宿だ。  
今晚空室はあるのだろうか。  
宿のお姉さんに聞くと  
「今晚ですか？大丈夫ですよ」  
予約帳も見ないで即答だった。  
「お盆時期なのに空いてるんですか？」  
「いえ、船が欠航なんで今日予約した人は島に来られないんです」  
そうか、考えてみれば当たり前の事か。  
我々は島から出られないと思っていたが、入ってくる事もできないのか。  
これでひと安心だ。

しかし台風が近くに居る時の離島というのは、本当にやる事が無い。  
台風が来るとサーフィンをする人がいると聞いたが、ボードを持っていない。  
ボードを持っていないどころが、サーフィンをやった事がない。  
多分私はサーフィンは苦手だと思う。  
何故ならスケボーが苦手だからだ。  
なのであまり興味を持った事もない。  
じゃあビーチグラスでも拾って工作でも作るか。  
う～ん、今から趣味に工作を増やすっていうのもなあ・・・  
結局今日もやる事がないので、ランさん達とゆんたくをする事になった。  
明日こそは本島へ帰れるのだろうか。

沖縄に来る度に毎回一期一会があった。  
初めてビーチバーで会う人と意気投合して、まるで昔から知り合いだったようにツッコミを入れあったり。  
そこで連絡先を交換する仲になる人もあれば、しない相手もあった。  
交換しないからといって別に相手を信用していないわけではない。  
縁の違いなのだ。  
いろんなカタチの縁があって、連絡先の交換をしていないのに阿嘉島のビーチバーで何度も偶然会って飲み明かす人が居た。



もちろん阿嘉島に住んでいる人ではない。

その人とは東京でも3回ぐらい飲み屋でバツタリ会っている。

そして肩を並べて呑む。

何度も会っているうちに連絡先を交換しようと思った時もあったが、連絡先を知らないのに会える縁もいいなと思い、結局交換はしていない。

若い時は出会った人との縁をとにかく大事にしようと、長く繋がっている事が縁を大切にする事だと思っていた。

しかし沖縄へ来て、人同士の壁がない世界に居ると、縁というものについて考え方を換えざるを得なかった。

沖縄の人は「この人とは考え方が同じだし気が合うから長い縁になる」という考え方はしない。

目の前に居る人が縁であり、「イチャリバチヨーデー」なのだ。

それが明日も目の前に居る縁なのか、10年後に久々に会う縁なのか。

そこに深いも浅いも無い。

とにかく人を大切に、助け合い、自分の所へ訪ねてきたら誰にでも手厚くもてなす。

縁という概念が全く違う。

今回の旅行で知り合ったランさんと順子さんは、今後何回顔を合わせる縁なのか分からないが、一生記憶に残る縁になった。

そして船が動き始めたら別れは来る。

それが明日なのか明後日なのか分からないが、その時は来る。

沖縄は海と空で出来ている 【第4話】 離島で台風が来ると大騒ぎ 《後編》

<http://p.booklog.jp/book/100826>

著者：ジョージ・スギーニー

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/george5/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/100826>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/100826>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ